

新刊紹介

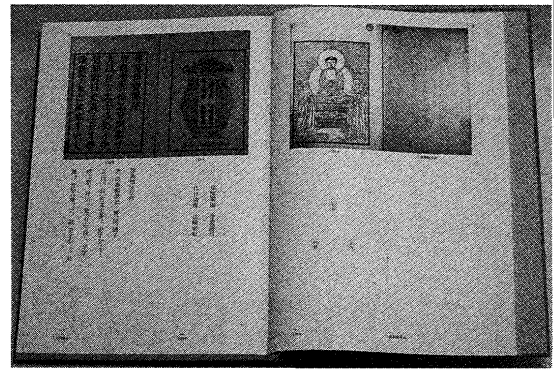
関口静雄・山本博也 編著

唐招提寺・律宗戒学院叢書 第二輯
『律苑僧宝伝』

深沢秋男

昭和女子大学の関口静雄氏と山本博也氏の研究成果として、「唐招提寺・律宗戒学院叢書」第二輯が昭和女子大学近代文化研究所から刊行された。この研究は、関口氏と山本氏が協力し合って進めておられるが、殊に関口氏の寝食を忘れて取り組まれる、その研究姿勢をつぶさに拝見している一人として、このような成果を手にして、実に感慨深いものがある。

関口氏が昭和女子大学に來られて、最初の研究発表は仏教の講式が文学に与えた影響に関するものであった。言うまでもなく、講式は、中世文学はもちろん、近世文学にも深い影響を与えているが、これを研究対象とするには、基礎的な素養を必要とし、簡単に取り組めるテーマではなかった。



2007年2月15日発行
昭和女子大学近代文化研究所
A4判 396頁
定価 10000円(本体)

多くの版本類の資料を示しながら行われた関口氏の発表の新鮮さは、今も印象に強く残って忘れられない。

その後、昭和女子大学は唐招提寺と深く関わることになり、その貴重な資料の整理・研究に取り組まれたのが、関口氏と山本氏であった。

関口・山本両氏は、平成十六年二月、第一輯『招提千歳伝記』を世に問われたが、それに続くのが本書『律苑僧宝伝』である。この両書は日本律宗において双璧をなすものと高く評価され、『招提千歳伝記』に関しては、本誌第七五〇号(二〇〇四年三月)に阿部泰郎氏の詳細な紹介がある。まず、本書の内容を知ってもらうために、目次を掲げる。

律苑僧宝伝(題簽、唐招提寺八十五世長老 俊海)	
目次	
刊行のことば(昭和女子大学長 平井聖)	
はじめに(編著者)	
凡例	
律苑僧宝伝 第一冊 序・凡例・目次／	
卷一之二	一
序・凡例・目次	三
卷第一 震旦諸師	四一
卷第二 震旦諸師	四九
律苑僧宝伝 第二冊 卷三之四	六五
卷第三 震旦諸師	六六
卷第四 震旦諸師	八八
律苑僧宝伝 第三冊 卷五之六	一一三
卷第五 震旦諸師	一一四
卷第六 震旦諸師	一四六
律苑僧宝伝 第四冊 卷七之九	一八一
卷第七 震旦諸師	一八二
卷第八 震旦諸師	二〇四
卷第九 震旦諸師	二二二
律苑僧宝伝 第五冊 卷十之十一	二四七
卷第十 檀桑諸師	二四八

卷第十一 博桑諸師	二六六
律苑僧宝伝 第六冊 卷十二之十三	二八七
卷第十二 博桑諸師	二八八
卷第十三 博桑諸師	三〇七
律苑僧宝伝 第七冊 卷十四之十五/跋	三三一
卷第十四 博桑諸師	三三二
卷第十五 博桑諸師	三五二
跋	三七七
解題(関口静雄)	三八四

『律苑僧宝伝』は、この目次からも分かるように、巻第一―巻第九は震旦(中国)の僧伝で、曇摩迦羅尊者以下二百二十七人、巻第十―巻第十五は博桑(日本)の僧伝で、唐招提寺開山鑑真大師以下百三十四人、合計三百六十一人の律宗関係の高僧の伝記を収録している。

編者は各巻頭に「湖東安養寺後学 釈慧堅 撰」とある通り、釈慧堅である。この慧堅の関歴については関口氏の解題に詳述されている。慶安二年(二六四九)福岡県久留米市に生まれ、宝永元年(二七〇四)三月四日、京都東山の浄慈庵で没した。五十六歳の生涯であった。

慧堅は貞享二年(一六八五)に廃址となっていた近江の安養寺を再建し、元禄二年(一六八九)、四十一歳の時に本書を刊行している。関口氏によ

れば、慧堅は宗派を超えた人間関係を築き、南京律と北京律の両流派の真髓を享受した僧侶であり、唐招提寺の律学を撰取受容していたものと推測されるという。また、慧堅は難解な戒律を一般庶民に易しく伝えることに努め、村中に所在する寺院での生活そのものを戒律実践と解釈して、修業に励んでいたという。さらに、慧堅は弟子達に対しても、周辺住民へは常に慈悲の心をもって当るよう指導したと述べておられる。また安養寺の再興に際しても、慧堅は周辺住民の要望を十分に受け入れ、住民たちの協力を得て進めている事を、関口氏所蔵の文書『東方山安養寺再興任状之事』の内容などを吟味して実証しておられる。

『律苑僧宝伝』は、慧堅自筆の稿本が伝存未祥であり、大正四年に「大日本仏教全書」に収録された本文も、元禄二年の刊本を底本にしている。しかし、この翻刻には幾つかの不明なところがあるので、今回は関口氏所蔵の元禄二年八月八日刊行、十五巻七冊本を底本に採用して、より正確な本文の作成を行っている。

底本は原題簽を存し、刷度も良好な善本である。本書の体裁は、まず全冊を写真複製して上段に掲げ、下段に対応して翻刻を併記する方式を採用している。原本の面影を伝えながら、現時点での研究面に資するよう、漢字を現在通用の字体に改め

るなど、適切な処置をとっている。本文が漢文ゆえ、送り仮名、返り点など複雑な表記となっているが、校訂基準は極めて厳密で、正確を期している。書を校するは塵を掃くが如し、と言われているように、一字一字吟味して定着する作業は、言うは易く行ふは難いものである。これが研究の全ての基礎になるものであるから、何よりも正確でなければならぬ。本書は、その点に十分な配慮がなされていて、ここに、信頼し得るテキストが完成した。今後の研究に資するところは大きいと思われる。

なお、この本文の入力・校正などには、両氏指導の学生や卒業生十八名の協力があったとされている。教育的に見てもみごとなチームワークであり、改めて両氏の指導力の大きさを痛感する。

「唐招提寺・律宗戒学院叢書」第一輯・第二輯で、律宗書籍の代表的著作は公刊された訳で、今後、学界に大きく寄与するものと思われる。

関口氏・山本氏は、現在も唐招提寺関連資料の調査・研究を継続しておられ、ここには、まだまだ貴重な資料が多く残されているものと思う。その研究成果を、今後、第三輯・第四輯として続刊して頂きたい切望するものである。これは学界のためにも是非実現してもらいたい。

(ふかさわ あきお 元昭和女子大学教授)